

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：33902

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770021

研究課題名(和文) 後期インド仏教における認識論・論理学の体系化 新出写本による校訂と資料環境整備

研究課題名(英文) A study on the systematization of theory by the late Buddhist epistemological tradition

研究代表者

石田 尚敬 (Ishida, Hisataka)

愛知学院大学・文学部・講師

研究者番号：80712570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、インド仏教最後の論理学者モークシャーカラグプタ(12世紀頃)の著作『タルカバーシャー』(論理の言葉)について、インド各地に所蔵されるサンスクリット語写本を蒐集し、本書のチベット語訳も参照しつつ、原典テキストの批判校訂版を作成した。同時に、同書が大きく依存する、仏教論理学の大成者ダルマキールティ(7世紀頃)の著作『ニヤーヤヒンドゥ』(論理の滴)についても、ダルモッタラ(8世紀頃)の注釈書とともに調査し、上記『タルカバーシャー』との並行文を収集した。これらの成果を合わせて、インド仏教思想のひとつの到達点を窺うことのできる、仏教論理学の定義的用例を網羅した述語集を作成した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project was to create a critical edition of Moksakaragupta's Tarkabhasa (ca. 12th century) on the basis of three Sanskrit manuscripts photographed in India: two codices from the Jain Temple in Patan and one from the Oriental Research Institute in Mysore. The present research established that four manuscripts from the Oriental Institute in Baroda stemmed, directly or indirectly, from Patan codices and they were consulted only when necessary. The traditional block-printed editions of the text were also used for editing the Tibetan translation of the Tarkabhasa. The Nyayabindu of Dharmakirti (ca. 7th century) and the commentary by Dharmottara (ca. 8th century) thereon were also investigated and parallel texts to the Tarkabhasa were collected, since Moksakaragupta often used the texts of previous works, with and without modification. Finally, a glossary of the significant technical terms of the Buddhist epistemological tradition was prepared.

研究分野：インド哲学仏教学

キーワード： 仏教論理学 インド仏教 モークシャーカラグプタ ダルマキールティ タルカバーシャー ニヤーヤヒンドゥ サンスクリット 古典チベット語

1. 研究開始当初の背景

(1) インド仏教最後期に活躍した論理学者モークシャーカラグプタ(12世紀頃)の著作、『タルカバーシャー』(論理の言葉)は、仏教認識論・論理学の現存する最後の著作とされる(塚本啓祥他編『梵語仏典の研究 論書編』479頁)。本書は、梶山雄一博士によって研究が進められ、これまでに英訳(“An Introduction to Buddhist Philosophy, An annotated translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta,” *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University* 10, 1966年)および和訳(中央公論社『世界の名著2』1967年)が詳細な注と共に公刊され、国際的にも高い評価を得ている。ただし、その後の仏教論理学の研究の進展は著しく、思想史に関する記述など、改定を求められる箇所も散見された。また、仏教論理学を大成したダルマキールティ(7世紀頃)及びその後継者の学説との比較も課題として残されていた。

(2) 『タルカバーシャー』の原典テキストについて、通例マイソール版が底本とされるが、マイソール版の訂正箇所は多く、必ずしも十全な批判校訂版(critical edition)とは言えない。また、現在、マイソール版を所蔵する図書館も世界的に見てほとんど存在しないことから、信頼のおける原典テキストが入手困難という事態は、インド思想研究に取り、極めて遺憾な状況にあった。また、マイソール版に先立つアイアンガー校訂の Gaekwad Oriental Series 版(GOS版)については、校訂に用いられたバローダ東洋学研究所の写本4点と研究代表者(石田尚敬)が撮影したパタン市のジャイナ教僧院所蔵本(2本)の関係が、不明のままであった(上掲『梵語仏典の研究 論書編』480-481頁)。

(3) 仏教認識論・論理学に関する術語集として、中村元博士の「インド論理学の理解のために : インド論理学・術語集成—邦訳のこころみ—」(『法華文化研究』第9号、1983年)が存在するが、本書はインド正統哲学諸派と仏教論理学派の述語を併せて掲載している。対立するこれらの学派の間では、定義を異にすることも多く、現在の研究状況からすると、ひとつの学派の著作に限定して述語集を作成した方が、他派の術語との混乱を招かないといった利点が大きいと思われる。また、サンスクリット語の論理学用語をいかに日本語や英語に訳すべきかについても、再検討の余地があった。

2. 研究の目的

(1) モークシャーカラグプタ著『タルカバーシャー』は、インド仏教における認識論・論理学の到達点を示すものとして、これまでも研究者の注目を集めてきた。しかしながら、原典の批判校訂版(critical edition)と呼ばれ得るものは、これまで作成されていない。

こうした状況に鑑み、仏教認識論・論理学研究の資料環境の整備を目指すと共に、同著の思想史的位置づけも明らかにする。

(2) サンスクリット語の原典テキストについては、インドにおいて蒐集した複数のサンスクリット語原典写本を利用し、批判校訂および解読研究を実施する。同著には10世紀以降の仏教論理学書としては比較的稀なチベット語訳が残されていることから、同著のチベット語訳テキストの校訂版も併せて作成する。

(3) モークシャーカラグプタはインド仏教最後期の論理学者として知られる。『タルカバーシャー』は、仏教論理学の綱要書として知られるが、その述語定義の多くを、ダルマキールティ著『ニヤーヤピンドウ』(論理の滴)およびダルモッタラ(8世紀頃)の注釈書に拠っている。『ニヤーヤピンドウ』およびダルモッタラの注釈書についても、インドにおいて蒐集した原典写本を用いてテキストを批判校訂し、さらに『タルカバーシャー』との並行文を調査する。

(4) 上記の成果を利用し、モークシャーカラグプタの『タルカバーシャー』を中心とし、ダルマキールティ著『ニヤーヤピンドウ』およびダルモッタラの注釈書、さらにはダルマキールティの後継者の関連テキストを掲載した仏教論理学の述語集を作成する。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、モークシャーカラグプタ著『タルカバーシャー』について、サンスクリット語原典テキストの批判校訂版の作成を最初の課題とする。最初に、グジャラート州パタン市にあるジャイナ教僧院所蔵の貝葉写本2点と、グジャラート州ヴァドーダラ(バローダ)の東洋学研究所に所蔵された写本4点を比較し、これまで不明であった写本の系統を明らかにする。さらに、カルナータカ州マイソール東洋学研究所所蔵の貝葉写本1点を加え、原典テキストの校訂作業を完成させる。さらに、『タルカバーシャー』については、逐語的な翻訳で知られるチベット語訳が残されていることから、デルゲ版、ナルタン版、チョーネ版、北京版、金写版の版本5点を参照し、その校訂本も併せて作成する。

(2) 『タルカバーシャー』が大きく依存するダルマキールティ著『ニヤーヤピンドウ』およびダルモッタラの注釈書についても調査し、インドにおいて蒐集した原典写本を用いてテキストを訂正しつつ、『タルカバーシャー』との並行文を収集する。さらに、モークシャーカラグプタに影響を与えたダルマキールティの後継者について調査し、関連テキストを収集するとともに、思想史について

明らかになった点を学術大会や論文の形で公表する。

(3) 上記の作業により資料環境を整備した上で、仏教論理学派の定義的用例を収集した述語集を作成する。

4. 研究成果

(1) モークシャーカラグプタの著作『タルカバーシャー』(論理の言葉)について、ナーガリー文字で書写されたグジャラート州パタン市のジャイナ教僧院所蔵写本2本、パローダ東洋学研究所所蔵写本4点を調査し、東洋学研究所所蔵本はすべてパタン写本に基づくことがわかった。そのため、パタン写本2本、カンナダ文字で書写されたマイソール写本1本を合わせ、本書のチベット語も参照しつつ、原典テキストの批判校訂版を作成した。

(2) 同時に、『タルカバーシャー』が大きく依存する、仏教論理学の大成者ダルマキールティの著作『ニヤーヤピンドゥ』(論理の滴)についても、ダルモッタラの注釈書とともに調査し、上記『タルカバーシャー』との並行文を収集した。これらの成果を合わせて、インド仏教思想のひとつの到達点を窺うことのできる、仏教論理学の定義的用例を網羅した述語集を作成した。

(3) 思想史研究においては、モークシャーカラグプタが、ダルマキールティの『ニヤーヤピンドゥ』だけでなく、ダルマキールティの『知識論決択』(プラマーナ・ヴィニシュチャヤ)や同書に対するダルモッタラの注釈書等も広く参照していることを明らかにし、シンポジウムや学術大会で発表するとともに、論文の形で論じた。

(4) 上記の成果を、春秋社より刊行予定の『仏典解題辞典』(改訂版)において、『タルカバーシャー』の項目を執筆する際に反映させることができた。同書は未刊のため、以下に引用しておきたい(以下の事典項目部分は引用不可)。

タルカバーシャー (Tarkabhāṣā, 論理のことば, 思釈説): インド仏教再後期の論理学者モークシャーカラグプタ (Mokṣākaragupta, 1050~1202の間に活躍)の著作。ダルマキールティ (ca. 600~660 A.D.)以降, 仏教認識論・論理学はその問題領域を拡げ, 深化させながらさらに発展したが, その最終段階において著された同学派の綱要書。〔内容〕第1章・知覚論 (pratyakṣa), 第2章・推理論 (自己のための推論 svārthānumāna), 第3章・弁証論 (他者のための推論 parārthānumāna)の全3章からなり, ダルマキールティの主著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』(知識論決択 Pramāṇavinīścaya)で採用され, 入門書

『ニヤーヤ・ピンドゥ』(論理の滴 Nyāyabindu)に踏襲され, 類書において一般的となった構成に倣う。著述は, 上記『ニヤーヤ・ピンドゥ』とそれに対するダルモッタラ (ca. 740~800 A.D.)の注釈書 (Nyāyabinduṭīkā)に拠るところが大きい, それ以降の学説の展開も巧みに受容している。特に, プラジュニャーカラグプタ (ca. 750~810 A.D.)の詩節が「荘嚴作者」(Alāṅkāra)の名とともに引用され, 重視されるほか, ジュニャーナシュリーミトラ (ca. 980~1030 A.D.)などの影響も見られる。第1章では, 認識手段 (プラマーナ pramāṇa)の総論から, 知覚の分類, 知覚の対象, 認識手段とその結果 (量と量果)が論じられ, 第2章では, 2種の推理 (推理・弁証)の定義, 論証因の3条件 (因の三相), 論証因の分類 (本質・結果・非認識), 非認識 (anupalabdhi)の分類が扱われる。第3章では, 論証式を構成する方法を規定, 分類していく中で, 論証式の具体例を示すことによって, あわせて種々の学説が論評される。具体的には, 刹那滅論証, 有神論批判, 無我説, 言語哲学 (アポーハ論), 仏陀が全知者であることの論証, 輪廻の論証などが論じられる。最後に, 仏教内の代表的四学派, 毘婆沙師・経量部・瑜伽行派・中観派の学説が簡潔に提示される。この部分は, アーリアデーヴァに帰せられる『智心髓集』(Jñānasārasamuccaya)やジターリ (ca. 960~1040 A.D.)の影響が指摘され, また後代, 仏教以外の学派で仏教の学説を論評するときの基本になるものとして利用された。本書は, それ自体綱要書でありながら, 問題点の適確な処理を通じてダルマキールティ以降における仏教論理学の研究全体を俯瞰するのに好個な書と言えよう。〔テキスト〕最初のテキスト出版は, 1942年, パタンのジャイナ教僧院所蔵の貝葉写本2本の複写とその書写からなるパローダ東洋学研究所の資料 (計4点)に基づき, クリシュナマーチャリヤ (Embar Krishnamacharya)によって果たされた。ただし, パタン写本冒頭の数葉に欠損があり, テキストの冒頭部分に問題を残すほか, チベット語訳が参照されなかった。その後, アイアンガー (H. R. Rangaswami Iyengar)は, ジャイナ僧により寄贈されたと伝えられるマイソール東洋学研究所所蔵のカンナダ文字写本を新たに用い, 最初の校訂本, チベット語訳も参照して再校訂を行った。本テキストは, 現在では閲覧が困難となったが, インドで出版された流布本は, 直接・間接的にこの校訂本に基づいている。チベット語訳は, パンロドゥテンパ (dPang blo gros brten pa)の独力でなされたと伝えられるものの, その質は高く, 梵本の補正上不可欠の意義を有する。ただし, 後の挿入と思しきテキストが見られる点で, 注意を要する。【テキスト】〔サンスクリット〕E. Krishnamacharya, *Tarkabhāṣā*, Baorda 1942 (Gaekward's Oriental Series 94). H.R.R. Iyengar, *Tarkabhāṣā and Vādasthāna*, Mysore 1952 (2nd

ed.). [チベット訳] D4264, P 5762. 【翻訳】 Y. Kajiya, *An Introduction to Buddhist Philosophy: an annotated translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta*. 『京大文学部紀要』10, 1966 [同 *Studies in Buddhist philosophy (selected papers)*, Kyoto, 1989 に再録. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 42, 1998 として独立出版]. 梶山雄一「認識と論理(タルカパーシャー)」『世界の名著 2: 大乘仏典』中央公論社, 1967 所収[『論理のこゝろ』中公文庫, 1975 として独立出版]. B.N. Singh, *Tarkabhāṣā: a manual of Buddhist logic*, Varanasi, 1988 [テキスト含む]. 【参考】 梶山雄一「モークシャーカラグプタの論理学」『印度学仏教学研究』6 (1), 1958. 白崎顕成「Jitāri と Mokṣākaragupta」『印度学仏教学研究』25 (1), 1976. 同「Jitāri と Mokṣākaragupta と Vidyākaraśānti」『印度学仏教学研究』26 (1), 1977.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

石田尚敬、仏教論理学派における prajñā、仏教文化研究論集 (prajñā 特集号) 査読有、18 巻、2017、75-92

石田尚敬、瞑想者の認識をめぐるダルモッタラの考察—『知識論決訳注』を中心に—、愛知学院大学禅研究所紀要、査読無、45 巻、2017、29-40

石田尚敬、シャーンタラクシタの言語哲学、東海佛教、査読有、62 巻、2017、1-15

石田尚敬、瞑想者の認識をめぐる考察—仏教認識論・論理学派を中心に—、愛知学院大学禅研究所紀要、査読無、44 巻、2016、25-45

石田尚敬、仏教論理学派における分別知の考察—シャーンタラクシタとダルモッタラの比較から—、仏教学、査読有、57 巻、2016、19-36.

[学会発表](計10件)

石田尚敬、ゴク・ロデンシェーラップ著『五巻本の解説』(Bam po nga pa'i bshad pa) の構成、第 64 回(2016 年度)日本チベット学会学術大会、2016 年 11 月 20 日、身延山大学(山梨県南巨摩郡身延町)

石田尚敬、バーヴィヴェーカ著『中観心論』から見たディグナーガのアポーハ論、日本印度学仏教学会第 67 回学術大会、2016 年 9 月 3 日、東京大学(東京都文京区本郷)

石田尚敬、シャーンタラクシタの言語哲学、東海印度学仏教学会第 62 回学術大会、2016 年 7 月 9 日、愛知学院大学(愛知県・日進市岩崎町)

榎本文雄(代表)、斎藤明、渡辺章悟、高橋晃一、石田尚敬、一色大悟、仏教認識論における知覚と分別(パネル: 煩惱の根源を巡って—vikalpa(分別)と prapañca(戲論)—)、日本印度学仏教学会第 66 回学術大会、2015 年 9 月 20 日、高野山大学(和歌山県伊都郡高野町)

石田尚敬、アポーハ論におけるダルモッタラの 2 種の否定 解釈、日本印度学仏教学会第 66 回学術大会、2015 年 9 月 20 日、高野山大学(和歌山県伊都郡高野町)

石田尚敬、仏教論理学派における分別知の考察—シャーンタラクシタとダルモッタラの比較から—、仏教思想学会第 31 回学術大会、2015 年 7 月 11 日、筑波大学(茨城県つくば市)

石田尚敬、膜想者(yogin)の知覚、パウツダコーシャ・プロジェクト第 2 回公開シンポジウム: 仏教用語の今昔—翻訳はいかにして可能か—、2014 年 11 月 15 日、東京大学仏教青年会本郷ビル 2F ホール AB(東京都文京区)

石田尚敬、モークシャーカラグプタ著『タルカパーシャー』の原典写本について、日本印度学仏教学会第 65 回学術大会、2014 年 8 月 30 日、武蔵野大学(東京都江東区)

Hisataka Ishida, "The exclusion of superimposition (*samāropavyavaccheda*)," Fifth International Dharmakirti Conference, 2014.8.27, University of Heidelberg, Germany.

Hisataka Ishida, "Dharmottara's Investigation on Concept Cognition," 17th Congress of the International Association of Buddhist Studies, 2014.8.19, University of Vienna, Austria.

[図書](計1件)

Elisa Freschi & Artemij Keidan, Pascale Hugon, Hisataka Ishida, Kei Kataoka, Patrick McAllister, Hideyo Ogawa Kensho Okada, Alex Watson, *Reading Bhaṭṭa Jayanta on Buddhist Nominalism*, Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2017, 331 (担当 207-216)

[その他]

ホームページ等

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html

[「仏教用語の用例集(パウツダコーシャ)および現代基準訳語集」、斎藤明教授が研究代表者を務める科学研究費プロジェクト(基盤(S)研究課題番号: 23222001)のホームページ]

<http://zenken.aichi-gakuin.ac.jp/research/index.ht>

ml

[研究代表者（石田尚敬）が研究員を兼任する愛知学院大学禅研究所のホームページ・研究成果公開]

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

石田 尚敬 (ISHIDA , Hisataka)

愛知学院大学・文学部・講師

研究者番号：8 0 7 1 2 5 7 0